

甲斐における尾根上の城の比較私論

— 熊城を中心として —

畑 大 介

はじめに

近年、山城研究は急速に発展しつつあり、山城をいかに歴史の資料として活用するかについてもさまざまな試みが繰り返されている。特定の遺構、特に山城の虎口については、類例の分布、形態の時代的変遷、築城主体の特定等の手法で歴史資料化が進められているが、その他普遍的に存在する郭や堀切などの遺構については遺構の形態や法量が立地に影響されやすいため一般に築城手法を系統的にとらえるのは困難を極める。そこで複数の城の築城手法の比較検討の第一歩としては、まず立地を限定し影響を受ける要素を削減するのが得策ではなからうか。

星の数ほど存在する山城もより高きに立地するという性格上、山頂、尾根上、さらにその二つの融合体の三種類でそのほとんどは包括できるであろう。山頂と尾根上の区別は必ずしも容易ではなく、私自身も明確な見解をもち得ていないわけではないが、これから論を進めるにあたっては我々の一般的な認識でたりと考えている。

山頂の城の場合、そこから尾根へと遺構が続き複雑化しているものが多く、また方向性の要素が加わるため、比較検討に適しているのは方向性も限定される一本の尾根に遺構が展開する城であろう。

この視点にもとづき山梨県内の尾根上の城の中から甲府市の熊城、上九一色村の本栖城、上野原町の牧野砦を選びたい。このうち熊城は武田氏の本拠地、躰躰が崎館（武田氏館跡）とセットとされる要害城に隣接する城であり、武田氏滅亡後織豊系の改修が加えられたとされる要害城に比べ武田氏当時の遺構を良好に残しているとみられ、武田氏中枢の築城法を如実に表していると考えられる。これに対し本栖城は駿河、牧野砦は相模・武蔵との境に位置し、その一帯の武士団の国境警固の拠点である。

この三城の遺構をまず把握し、比較するなかで特徴を抽出し、そこから生まれる問題点について若干の考察を加えたい。

一 対象とする城の概要

熊城（甲府市上積翠寺町）

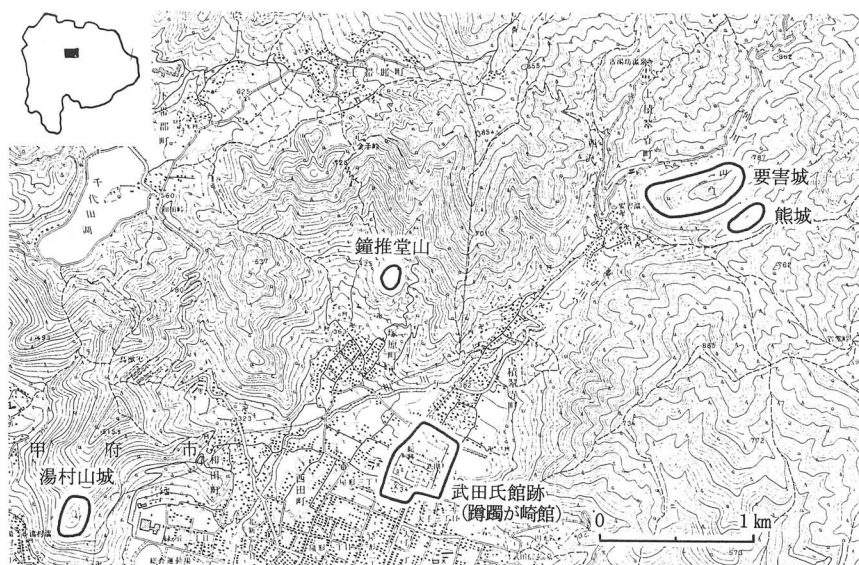


図1 武田氏館跡・要害城周辺図

熊城は、躰躑が崎館の北東二・五キロメートルの丸山に築かれた要害城の東南東の尾根上に位置する。熊城と要害城の距離は谷を挟んで四〇〇メートルほどで、まさに指呼の間である。かつては「要害城南遺構」「要害山東遺構」「要害山南城」などの名称で呼ばれ、造営に直接かかわる文献史料はないが、立地上要害城の支城としての役割をもつとする見方が支配的である¹⁾。

熊城の遺構図は、今までいくつか示されているが、図2を用いて遺構の概要をまとめておきたい。熊城の遺構の中心は尾根上の郭群で、遺構範囲内の最高地点に位置する郭⑮が主郭にあたらし、この主郭に向けて尾根の先端側(南西側)と山頂側(北東側)に分けて概説したい。

尾根の先端側から進むとまず①に入るが、ここは西側あるいは南側に傾斜しており明らかに削平されたとはいえない。①の先には②の堀切・堅堀、それを隔て郭③へと続く。郭③からは窪地を挟んで細長い郭⑤へと進み、その先の郭⑨から⑬まで郭が段状に連続し主郭⑮へと続く。熊城の遺構はおおむね南西から北東方向に展開しているため、尾根の中心線を基準として南東側を表側、要害城が位置する北西側を裏側と便宜的に呼びたい。郭⑨から⑬の表側には土塁が設けられ、郭⑫のみは西辺にも土塁が見られる。これらの土塁の内側の随所に石垣が見られるが、⑭と主郭⑮の間の窪地を表側にまわったところの石垣が最も大規模である。⑭はマウンド状で頂上もきれいに削平されており、他の郭とは異質である。主郭⑮は二段に分かれ表側および堀切⑰側に土塁がめぐる。これらの郭群をつなぐ通路は明確でない部分もあるが、一貫して裏側斜面にある。

一方、山頂側から尾根を下ると⑰の堀切・堅堀があり、そのさき

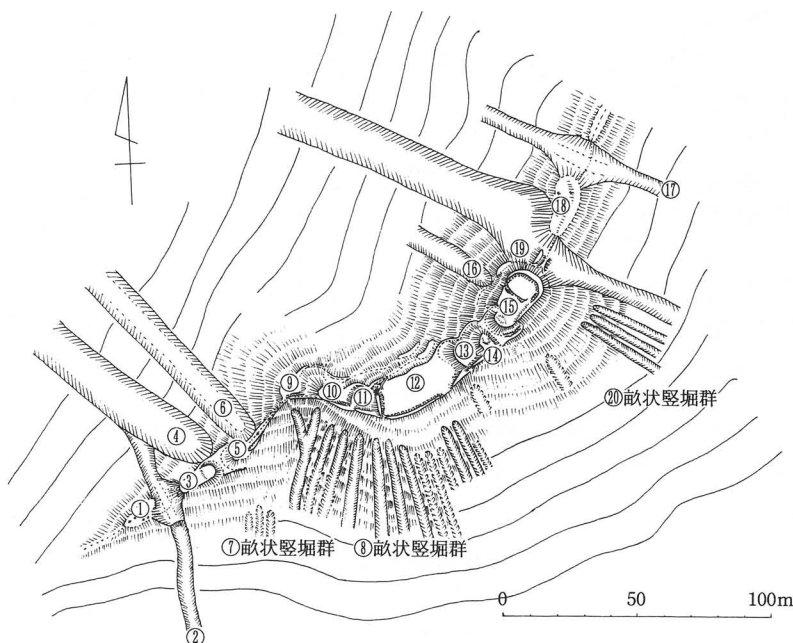


図2 熊 城 図

に⑬の空間があるが裏側に向けて傾斜しており①と同様、あきらかに削平されたとはいいたい。そして⑬から⑭の堀切の土橋を渡り主郭⑮へと至る。

また、この城においては堅堀が顕著で、堀切から展開しているものもある。裏側斜面の④⑥⑭が特に大規模で、④と⑭は自然の崩れを利用しているとみられる。また表側斜面には⑦⑧⑯の畝状堅堀群があるが、武田の城の中では珍しく、注目を集めている遺構である。

『高白斎記』によると、要害城は永正十七年（一五二〇）六月に城普請を始められたことが知られるが、熊城については文献上にはあらわれず、厳密な造営時期を把握することはできない。そのような状況のなかで、中田正光氏は当時の情勢から熊城が築かれる時期を信虎と勝頼の両時代にまず限定し、さらに畝状堅堀の規模が高天神城と類似していることなどから勝頼による築造と推定している³。一方、千田嘉博氏は、畝状堅堀群がその最上部に横堀を伴っていないことから熊城形成の画期を天文期以降、永禄期以前とし、異なった見解を示した⁴。さらに千田氏は織豊系の築城技術が随所にみられる要害城に比べ、熊城は当初の武田氏の遺構をよく残すものと考えている。

本栖城（西八代郡上九一色村）

本栖は、甲斐と駿河を最短コースで結ぶ中道往還の甲斐側の入口にあたる。本栖湖の東岸に位置する本栖村落の北にそびえる烏帽子岳から東に延びる尾根上に本栖城は築かれ、甲駿国境の警固のための境目の城としての性格づけが

進む。また烏帽子岳山頂（西側）から進むと堀切⑩⑪を通過して郭⑫に入り、主郭⑨へと至る。主郭⑨の北側斜面にも三段の郭⑬⑭⑮が配され、南側斜面は崖となっている。

天文二十二年（一五五三）五月晦日に武田晴信が西之海衆にあてた朱印状には「本栖之番」とあり、また永禄五年（一五六二）の武田晴信印判状（富士浅間社文書）にも「本栖之定番」とみえ、西之海衆や吉田の御師衆が本栖之番（定番）に動員されたことがわかるが、この「番」については現在、本栖関所と本栖城の番の二つに見解が分かれ、結論を得ていない。また、永禄二年（一五五九）三月二十日付の「分国商売之諸役免許之分」なる書立によると、この年以前に「就山内在城諸役所并諸関令免許者也」という文書が武田氏から九一色衆に宛て出されており、この「山内在城」が本栖城にあたるとみられ、この時期にはすでに築かれていたと考えられる。さらに『甲斐国志』によると永禄四年五月十日の武田家印判状には「就本栖在城鳴沢六月関役内三分一出置候」とあり、小林九郎右衛門尉ほかいわゆる九一色衆宛で、これらの史料により、永禄前期には本栖城には少なくとも九一色衆が動員されていたことがわかる。

本栖城の遺構は全体的には武田氏時代の状況を残していると考えられる。しかし石積みについては徳川家康による補修が加えられた可能性がある。九一色衆の有力な一員で本栖を本拠とする渡辺凶獄佑は武田氏滅亡後家康に従い、中道往還警固を勤めている。

牧野砦（北都留郡上野原町四方津）

甲斐国の最東端に位置し、相模・武蔵との接点にあたるこの

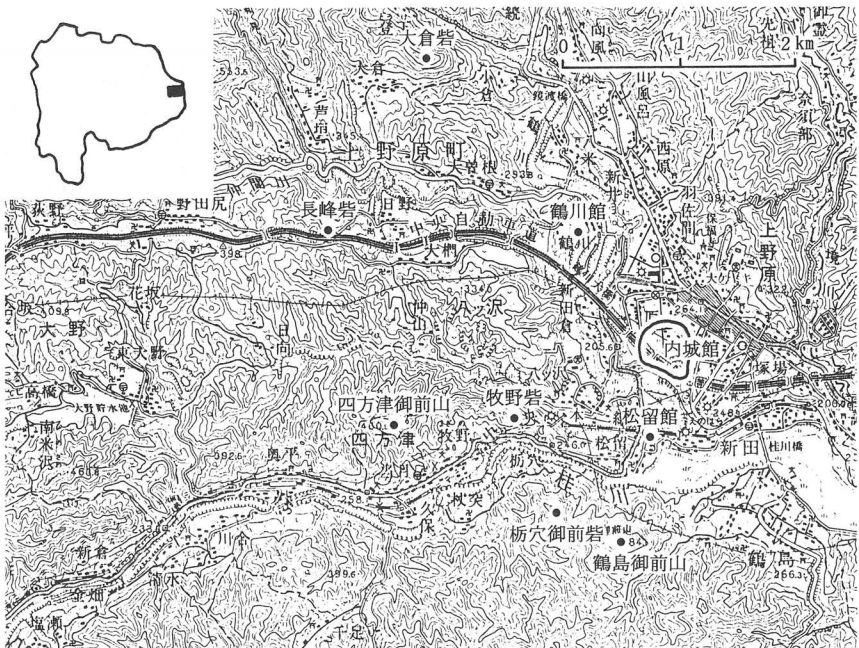


図5 牧野砦周辺図

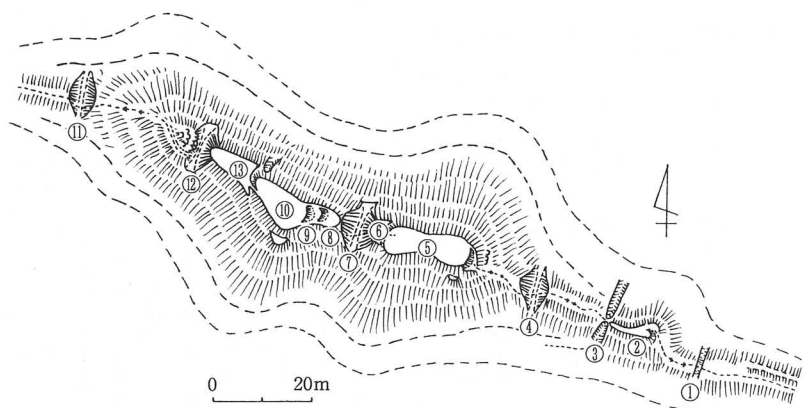


図6 牧野砦図

地は古くから交通の要衝として重要視されてきた。

牧野砦は、桂川北岸にひらけた四方津村落の北東側の尾根上⁽¹⁾で、この尾根の西側山頂には烽火台としての伝承を持つ四方津御前山が位置する。さらに桂川対岸には板穴御前山砦と鶴島御前山、甲州街道のルートには長峰砦、仲間川対岸には大倉砦などと城塞が集中する地域で、それらがそれぞれの陸路、水路の抑えとして築かれたと考えられている。

牧野砦の中心となる郭は⑤と⑩であるが標高の高い⑩を主郭と呼んでおきたい。東側から遺構部に進むと小規模な堀切①があり、郭②から堅堀③の間を通って堀切④へと進み、郭⑤へはいる。郭⑤からさらに西に進むと一段下がって郭⑥があり、堀切⑦を渡って⑧へと至る。⑧⑨は狭いテラスが段状となり両脇に通路が設けられ主郭⑩へと通じるが、主郭⑩の虎口部分とみることが出来る。一方、西側から進むと堀切⑪⑫を越え、郭⑬から主郭⑩に至る。

牧野砦の造営について具体的に把握できる史料はない。戦国期においてこの一帯は加藤氏の勢力範囲であるが、加藤氏は武田氏に直属し、武蔵との国境を守ったとされる。『甲斐国志』は「古城跡（四方津村）」の項で、村内に居館を構え、表木戸、裏木戸という門関を村の進入路に設け、山上には要害城（牧野砦）を築いたとしている。

二 尾根上の城の比較

比較を試みるまえにまず各城の造営時期についてまとめておきたい。

熊城は要害城の普請が始められた永正十七年（一五二〇）以降に

築かれ、最終的に織豊系の改修を受けていないとみられるため武田氏の最末期の状態を今に残していると考えられる。本栖城は永禄二年（一五五九）には築かれ、石積みについては武田氏滅亡後、徳川家康入甲時に施された可能性があるが、城の基本的な構造は武田氏の時期に確定していたと考えられる。牧野砦については具体的な造営にかかわる史料はなく限定はできないが、隣接する長峰砦や栃穴御前山砦などともに武蔵に対する軍事的な緊張関係の発生に伴って造営されたものと考えられる。また、城は改修され続けるものであり、天正四年（一五七五）に要害城が修理されたように長篠敗戦後においては本拠地、国境部ともに城の改修は著しいとみられ、この三城についても武田氏最末期の状況を残しているともてよいと思われる。

まず構成している遺構の種類比較であるが、当然現地表面観察により確認できる範囲ということになる。熊城は郭、堀切、堅堀からなり、郭には土塁や石積み、それに明確ではないが虎口を形成しているとみられる部分もある。堅堀は堀切から展開しているもの（②⑬⑭）とただ堅堀のみのもの（④⑥⑦⑧⑩⑪⑫）に分かれ、後者の中には畝状堅堀群が含まれる。これに対し本栖城と牧野砦は郭、堀切は備えるが堅堀は顕著ではない。特に熊城の堅堀④⑥⑪は突出した規模で、要害城の主郭裏側の堅堀に匹敵する。一方、牧野砦の堀切はまさに尾根部分のみを掘り抜いたもので堅堀を伴わない。これは大月市七保町の駒宮砦や上野原町の栃穴御前山砦と共通で郡内の山城の特徴の一つとみられる。畝状堅堀群は甲斐国内の城ではめずらしく、富沢町の真篠砦はか数例に止まる。

つぎに尾根の中心線を挟んで両側を比較してみたい。

熊城の郭は表側に土塁が一貫して見られ、郭を結ぶ通路はいずれも裏側をまわっている。このことは裏側に武田氏の本拠地の詰め城である要害城があり、支城という熊城の性格上表側からの攻撃を想定しているためで、一般的にも理解しやすい。また堅堀をみても表側には畝状堅堀群が設けられ、一方裏側には大規模な堅堀が施され表側と裏側では異なった様相を示している。このように尾根の中心線を挟んだ両側の状況の違いを「表裏性」という言葉で呼びたい（外敵の侵入が想定される方を表とする）。

つぎに本栖城についてみてみたい。本栖城は西から東にのびる尾根上に築かれ、甲斐駿河を結ぶ中道往還が尾根の東側を迂回して通り、城の南側が駿河側、北側が甲斐側となる。郭に土塁が設けられているのは郭⑬と⑭のみであり、郭の西側に設けられたもので今回の表裏性には関係ないが、郭⑦と⑧を結ぶ通路の南側には石積みを施した塁がある。尾根上の郭を結ぶ通路をみると郭⑬の西側で堀切⑪から上がってくる通路のみが南側を通しているが、それ以外はいずれも北側をまわっている。郭⑬の西側の通路は立地の制約上南をまわっているとみられるため、本栖城の郭をつなぐ通路も敵側である駿河側の反対側（裏側）を意識してまわっており、熊城ほど強くはないが表裏性は感じられる。

上野原一带において、甲斐と武蔵を結ぶ道はいくつか存在する。牧野砦にかかわる道としては北側の甲州街道となったルートと、すぐ南側の桂川沿いの陸路あるいは桂川の水路があげられるが、立地上後者に隣接しており、南側を意識して築かれた城と考えられる。しかし郭に土塁は見られず、郭へ入る通路も一定した傾向はなく、表裏性は感じられない。

最後に郭と堀切の位置関係についてみてみたい。

熊城においては①⑱の空間は十分な削平がされておらず現状では郭とは認定しがたい。そうすると熊城の郭群は尾根の先端側は堀切②、山頂側は堀切⑭⑮に挟まれた尾根上に築かれていることになり郭間には堀切は見られない。また郭間に堀切を設けようとする場合は、堅堀④、あるいは⑥を延ばして郭③と⑤の間、あるいは郭⑤を掘り切る方法と、⑭と主郭⑱の間の窪地を掘り切る方法があり、いずれも比較的容易に堀切が施せる。しかし、しいてそれをおこなわないところに郭群を寸断しまいとする意識が読み取れるのである。このような郭と堀切の位置関係からみると熊城の場合は郭の独立性が乏しいといえる。以後郭間の堀切の有無を「郭の独立性」という言葉で表したい。この「独立性」は、たとえ堀切に橋がかかけられていても、郭の閉鎖性や孤立感はぬぐいざることができないことを基礎としている。

本栖城は熊城とまったく同じことがいえる。①は削平を受けたとはいいがたいため、尾根上の郭群は尾根の先端側は堀切②③④⑥により、山頂側は堀切⑩⑪により区切られているが、それらの間の郭群の間には堀切はなく、郭の独立性が乏しい。

牧野砦は遺構部の前後に堀切①⑪⑫があるが、郭②と⑤の間に堀切④があり、さらに中心となる郭⑤と⑩の間にも堀切⑦がある。このように郭の間を隔てるように堀切が施されている部分があり、郭の独立性が高いといえる。

三 特徴の要因について

前章の比較において熊城は本栖城や牧野砦に比べ堅堀が発達して

いる点、表裏性については熊城は顕著で、本栖城がそれに継ぎ、牧野砦はみられない点、郭と堀切の位置関係による郭の独立性については、熊城と本栖城が乏しく、牧野砦は顕著である点を指摘した。

堅堀については、特に熊城の④⑥⑱のような大規模のものは管見の限りでは一般的ではなく、要害城の例を合わせ考えると中心的山城に限られるのではないかと思われる。

表裏性については、熊城のように顕著な城は、外敵の進入方向を限定しその備えとしての施設が充実しているあらわれとみることができ、その目的に向けて発達した形態とすることができよう。しかしこれは地表面観察の結果であり、発掘しなければ確認しづらい横堀や柵列等の阻塞類の存在も念頭にいれて今後検討をする必要がある。

郭の独立性については興味のある点は、郭に入る集団の状況を反映する可能性があることである。松岡進氏は文献史料を示す中で特定の物主を郭に張り付けている状況を把握し「城館の防衛態勢が、城主と各曲輪の主との主従関係の特質をふまえて成立していることを推定できる」としている¹⁹。

熊城の郭は両端の堀切に守られ独立性に乏しく、段状に連続しているが、この郭に配された個々の集団も独立性に乏しく、しかも階層差があると位置づけることができるであろうか。熊城に動員された者たちはまったく不明であるが、大月市の岩殿城については天正九年（一五八一）の武田氏朱印状により城の在番の一端が把握できる¹⁵。武田勝頼が萩原豊前に宛てたもので、それによると落合、小笠原、百々、徳行、黒駒など国中の諸士十名が岩殿城の在番と御普請役を勤めたことがわかり、史料報告者の須藤茂樹氏はこの十名は萩

原豊前の寄子、同心クラスと考えている。この岩殿城も武田氏直轄の城という見方が強く、郭の独立性はさほど強くない。熊城についても多地域の人々が動員されて郭に配置されていたことは想像でき、彼らが具体的にどのような関係にあったかは不明であるが、武田氏により、諸役免許等のかわりに在番を命じられたものとみられる。

武田氏の本拠地である熊城の形態の特徴は、武田氏の権力が強く介在した結果とみるのが自然であろう。しかし、多様なあり方を示している本拠地の城を見わたすと、一概に郭の独立性の乏しさを大名権力の介在の尺度とすることはできず、さらに多くの要因を視野にいれて検討をしなくてはならない。この熊城の郭群の状況は、個々の郭に配された集団がまとまっており一体であることによるとする見方と、城主によるおのおの郭管理の必要上独立性が乏しいとする相反する見解を内包しているように思われる。

本栖城においては、先にふれた「本栖之番（定番）」が本栖城の在番とすると、九一色衆に加え西之海衆と吉田の御師衆が動員されていたことになる。表裏性があり郭の独立性は乏しいという点においては熊城に近い縄張をもっており、笹本正治氏は「交通の要衝にあたる地の名主層に諸役免許などをし、衆を組織させ道路の確保と領域警固にあたらせ」国境を直接掌握したとしているが、本栖城の縄張にも熊城同様武田氏の権力の介在がくみとれるのではないだろうか。天正三年（一五七五）の長篠敗戦以降、中道往還は織田・徳川軍の甲斐侵入推定路のひとつとなり、武田氏

が強力に国境防備にかかわったあらわれとみられる。

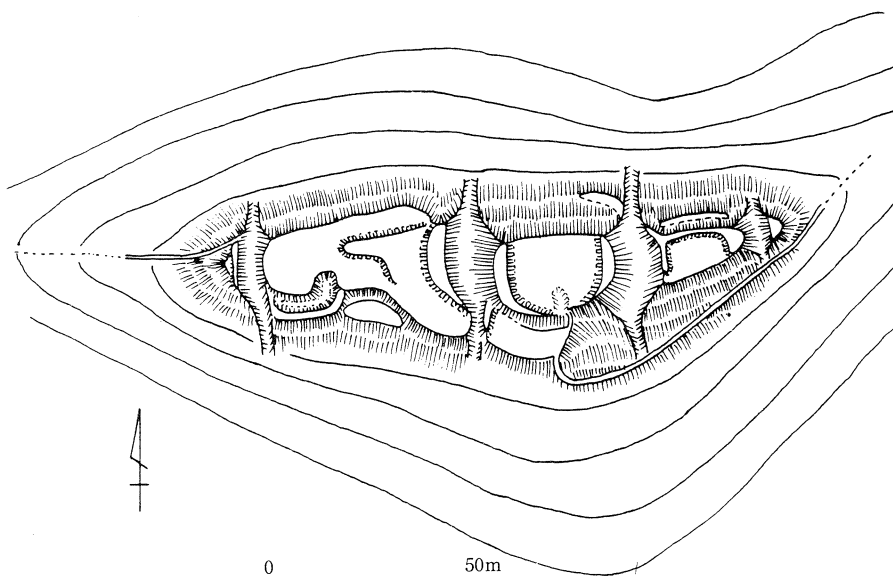


図7 駒宮砦（『日本城郭大系』8をもとに修正して作成）

それに対応して境目の城が複数築かれたが、四方津の村中に居館を構え、村の出入口に門閤を設け山上には要害の牧野砦を築いたという『甲斐国志』の記述からは村落に密接した山城のあり方が想像できる。本栖と同じようにこの地域においては加藤氏が武田氏に直屬して武蔵との国境を守ったとされるが、村落に密接する城が群集するこの一帯と、広範囲から本栖城に動員された中道往還国境部とは国境警固や城の運営のあり方に差があると考えられる。牧野砦は先の比較でも述べたとおり、熊城や本栖城と異なる面が多く、一部（主郭⑩東側）に複雑な虎口を持つものの全体的には未発達な印象を受ける。牧野砦は在地的な色彩がつよく、本栖城に比べ武田氏の権力的な介入は少なかったとみることができようが、郭の独立性が強い要因については今後の課題である。

なお、桂川対岸の枋穴御前山砦も郭群の間に堀切があり、また大月市七保町の駒宮砦は郭が三つ並び、その端に四箇所堀切が入って極めて郭の独立性が強い縄張を形成しているが（図7）、私は郡内北部においてこのような城が多いという認識を持っており、地域性も含めて今後検討していきたい。

おわりに

今回比較を試みた発端は、山城の縄張は、どのようにして決まり、何を反映するのかという興味からである。尾根上の城を対象としたのは、郭と堀切の関係を論じる場合立地から受ける影響が少なく、築城主体が同じで、城に求めるものが同じであれば、極めて類似した城となると考えたことによる。つまり郭間に堀切を入れようと思えば、多くの箇所に入れることができ、それにより形態が異なれば

必ずなんらかの要因がそこに存在すると考えたためである。しかし実際に形態が要因を反映するかという極めて基本的な問題は手つかずで残されており、今後それにむけての検討が必要となる。

郭の独立性については、郭と堀切の位置関係のみでみてきたが、郭間の距離や標高差、郭間を画する土塁の存在なども視野にいれて検討すべきである。

なにぶん史料が少なく造営時期についても十分把握できず、また現地表面観察という限られた条件の中での検討であり、実証的な論はすすめられなかったが、学兄諸氏からの叱正を賜りたい。

注

（1）熊城にかかわる文献としては次のものがあげられる。

①『城廓之研究（一）要害城』（一九五〇）。

②萩原三雄「要害城（付・南遺構）」（『日本城郭大系』第八巻 新人物往来社 一九八〇）。

③教野雅彦「要害城」（『山梨県の中世城館跡』山梨県教育委員会 一九八六）。

④中田正光「信虎が築いた要害山城」（『戦国武田の城』有峰書店新社 一九八八）。

⑤萩原三雄「熊城跡（要害城東遺構）」（『甲府市史』史料編第一巻 甲府市役所 一九八九）。

⑥千田嘉博「要害山城の構造」（『甲府市史研究』第8号 一九九〇）。

（2）遺構図が示されているのは注（1）の文献のうち①②③④⑥である（転載は含まない）。

(3) 注(1)④文献。

(4) 注(1)⑥文献。

(5) 本栖城にかかわる文献としては次のものがあげられる。

①柴田常恵「本栖城趾」(『富士の遺蹟』古今書院 一九二九)。

②出月洋文「本栖の城山」(『日本城郭大系』第八卷 新人物往来社 一九八〇)。

③拙稿「本栖の城山と樹海内の石塁遺構」(『山梨考古』第一五号 山梨県考古学協会 一九八五)。

④中田正光「溶岩の石積みが残る本栖城」(『戦国武田の城』有峰書店新社 一九八八)。

⑤萩原三雄「中世城館址研究の一視点について―特に経営主体者をめぐって―」(『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第一集 一九八九)。

(6) 『新編甲州古文書』二二四六号(以下『新甲』と略す)。

(7) 『新甲』二一六〇号。

(8) 柴辻俊六氏(『上九一色村誌』)や小島勇氏(『本栖関所調査報告書』)は本栖関所の関番とし、この見方が現在一般的であるが、萩原三雄氏は注(5)⑤文献で本栖城の城番としてとらえている。

(9) 『清水市史資料』中世編一七四頁。

(10) 注(5)②文献。

(11) 牧野磐にかかわる文献としては次のものがあげられる。

室伏徹「牧野磐」(『日本城郭大系』第八卷 新人物往来社 一九八〇)。

(12) 笹本正治「武田氏と国境」(『甲府盆地―その歴史と地域性』雄山閣 一九八四)。

(13) 『甲府市史』史料編第一巻史料六一六。

(14) 松岡進「戦国期城館遺構の史料的利用をめぐって」(『中世城郭研究』第2号 中世城郭研究会 一九八八)。その中で物主とは「より上級の領主から付属させられた軍勢を率いて行動する現地の指揮官」としている。

(15) 須藤茂樹「武田氏と郡内領に関する一史料」(『甲斐路』第四六号 山梨郷土研究会 一九八二)。

(16) 萩原三雄「岩殿城の史的考察」(『山梨考古学論集』II 山梨県考古学協会 一九八九)。

(17) 注(12)に同じ。

(18) 萩原三雄氏は注(5)⑤文献で武川衆や九一色衆・西之海衆などを例にとり、山城の立地形態から地域武士団などの経営主体者や、経営のあり方を探る試みをおこなっている。

(日本考古学協会会員)